

**研究主題 The Effectiveness of Cognitive Grammar
in the Teaching of English Prepositions and Articles
～英語前置詞および冠詞の指導における認知文法の有用性～**

要約：文法規則や用例を一方的に伝授することに偏りがちな文法指導を改善するうえで、「言語は意味的に動機づけられている」とする認知言語学の考え方に立つことで、「なぜそうなるのか」ということに対する合理的な説明が可能になり、それが学習者の理解を促進し定着にも寄与すると考え、実証研究を実施した。高校3年生に対し前置詞の指導を、高校1年生に対し冠詞の指導を一定期間行い、従来型の指導を行ったクラスと認知文法の知見を組み入れた指導を行ったクラスとで成果を比較した。その結果、いずれかの指導が絶対的に効果的というわけではなく、学習者の習熟度や個々の指導項目によって効果は変動することが明らかになった。両者の相互補完的な役割に注目すべきとの認識を得た。

キーワード：認知言語学、意味的動機付け、イメージスキーマ、名詞の可算性、指示対象の認識と同定

I はじめに

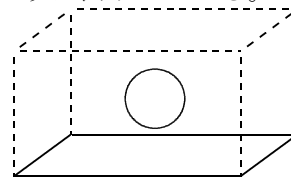
英文法の指導は1年生を対象に1年間かけて行われる場合が多いが、多くの内容を指導する必要から、授業では知識を一方的に伝授し、生徒には暗記学習を求めるといった傾向が強く見られる。語学から暗記学習の要素を取り除くことが不可能だとすれば、指導法そのものの改善に目を向けることが求められる。「なぜそうなるのか」という学習者の素朴な疑問に出来る限り答えることが、理解の促進と定着に寄与するはずである。

近年注目が集まっている認知言語学は、「言語は意味的に動機づけられている」という考え方に立っている。従って、その知見を取り入れることで、従来からの文法指導に新しいアプローチが可能になるのではないかと考えられる。とくに、他の指導領域からの独立性が比較的強く、また認知言語学での理論研究が多くなされている領域として、前置詞および名詞と冠詞がある。本研究では、この2つの領域での指導法の開発と実践を試みた。

II 先行研究

1. 前置詞

英語前置詞は多義語の代表である。認知言語学では、一見無秩序に見える多くの語義もコアとなる基本の意味からの派生であるとする。この基本意味を多くの言語学者は「視覚的イメージスキーマ」を用いて表示し、さまざまな意味はこのイメージスキーマを変換適用することで得られると主張している。高校生用の辞書や参考書にもこの考え方に基づく表示や記述が増えてきており、授業での活用も可能である。例えば、Eゲイト英和辞典では、前置詞 in のイメージスキーマを学習者向けに次のように表示している。



a cat in the kitchen といった物理的空間内を表す意味はもちろんのこと、容器に見立てることで a woman in a red coat や He is in

trouble. のような用法もこれに基づいて理解できる。基本的には空間や場所を表す意味が基本にあり、そこから時間やより抽象的概念へと意味が派生拡張していくとされている。

2. 名詞と冠詞

名詞は可算名詞と不可算名詞に分類されると学校文法では指導されるが、認知文法では名詞の可算・不可算は名詞によって決まっているのではなく、多くの名詞がコンテキストや捉え方次第で、可算にも不可算にも振る舞うことができるという考え方をする。例えば、形あるリンゴまるごと1個は可算名詞 (an apple) であるが、切り分けたりすりおろしたリンゴは不可算名詞 (apple) となる。対象物が明確な境界を持つかどうか、1つの基準である。

冠詞も通常は定冠詞と不定冠詞という二項対立的に指導されるが、定冠詞と不定冠詞はその機能は別であり、さらにゼロ冠詞(無冠詞)も冠詞の用法に含めなければならない。

まず、対象物をどう認識するかによって不定冠詞とゼロ冠詞の使用が決まる。先に示した an apple と apple の違いである。個別性があり単数個体として認識されるもの(を表す可算名詞)に不定冠詞が使われる。定冠詞の使用にはこれに聞き手の視点が加わる。名詞の指示対象が聞き手にも認知可能である、言い換えると、聞き手が唯一的に同定可能である (uniquely identify) という話し手の前提を必要とする。既出の名詞に the をつけるというのはこの条件を満たす一つの場合である。Our house is opposite the church. のように新出の名詞でも the church となる場合がある。これは、その地域に住む人はみなその教会を承知しているという前提に立っている。共有知識、背景知識、一般常識によって定冠詞の使用が可能になる場合もある。定冠詞の使用はときに言語以外の要素も関係するのである。このように、不定冠詞は話者による指示対象の認識、定冠詞は聞き手による指示対象の同定を反映するものである。

III 仮説と実験方法

先行研究が示す理論、および学習者への指導に応用した複数の実践例を踏まえ、英語前置詞および冠詞の指導には認知文法の考え方に立つ指導がより有効である。

と仮説を立て、実証研究を進めた。

平成 22 年度に授業を担当したクラスのうち、3年生の文系選択英語の2クラス(各21人)と1年生の英語Iの2クラス(各40人)で実験授業を行った。いずれも、一方を実験群として認知文法の知見を組み入れた指導、もう一方は統制群として従来型の指導方法を行った。3年生には5月～6月の時期に前置詞、1年生には10月～11月の時期に名詞と冠詞の指導を実施した。通常の授業の進捗とは別に行ったため、指導内容は独自に編成し、手作りのプリントを教材として用いた。週に2回の授業の前半約20～30分程度で指導できる分量とし、4～5回の授業で完結するものとした。シラバスに定められた指導予定を崩さず、また他の担当者の進捗から遅れをとらないためにはこれが限界であった。

指導前と指導直後、さらに指導の約1ヶ月後に25点満点のテストを行い、その結果により指導の効果を検証した。また、生徒の学力層別の点数比較、および設問ごとの正答率とその推移を比較することにより、より詳細に効果の有無と効果の違いを検証した。

IV 実証研究①とその結果(前置詞)

1. 指導項目

第1次	in on at
2	for about
3	through
4	over

2. 指導方法

<実験群 image-schema-based instruction >

- (1)基本用法の用例をイメージスキーマを用いて理解する。
- (2)派生用法の用例をイメージスキーマを用いて意味拡張の点から理解する。
- (3)さらに例文を追加し、理解を深める。

<統制群 translation-based instruction >

- (1)基本用法の用例を訳語を用いて理解する。
- (2)派生用法の用例を訳語を用いて理解する。
- (3)さらに例文を追加し、理解を深める。

3. 指導結果

(1)クラス間比較

	実験群	統制群
Pre-test	11.3	10.3
Post-test IA	14.3	11.4
Post-test IB	14.4	13.7
Post-test II	14.4	14.6

実験群は指導直後(Post-test IA)に効果が現れたが、時間を経過した後(Post-test II)には、両クラスともほぼ同じ成績となった。

(2)学力層別比較

平常の試験成績をもとに上位・中位・下位の3グループに分け、成績推移を比較した。(数値は省略)

実験群で最も伸びたのは圧倒的に上位、中位もかなりの伸びを示したが、下位はほとんど変わらなかった。対照的に、統制群では上位の伸びが小さく、下位が大幅に上昇した。

イメージスキーマを用いた指導は、生徒にとっては初めて触れるものであり学習刺激となる。丸暗記による既習知識に理由づけを与えることで、知識の活性化と理解の深化につながる。ただし、ある程度の習熟がないとこの効果は期待できず、下位には難しかったようである。

一方、従来型の指導は基礎基本の再確認という性格を帯びたため、下位には役立ったが、上位にはとくに目新しいものはなく、学習の動機づけにはならなかったと言える。

(3)設問別比較

実験群において、指導後の正答率が統制群に比べて大きく上昇したもの(①)と逆に下降したもの(②)があった。

- ① The children were too small to climb (over) the fence, so they dug a hole and went (through) it. ()適語挿入
- ② New York is situated on the Hudson River. 下線部の正誤判断

このほかにもそれぞれにあてはまる例があり、イメージスキーマによる指導が効果を発しやすい場合と、逆に混乱を招いたり予想に反して派生的用法に弱い場合があることが判明した。Post-test IB と II で比較すると保持率の善し悪しにも特徴が見られた。(詳細は省略)

V 実証研究②とその結果(名詞と冠詞)

1. 指導項目

- 第1次 可算・不可算の区別
- 2 集合名詞の振る舞い
- 3 不定冠詞
- 4 定冠詞
- 5 総称用法、ゼロ冠詞

2. 指導方法

<実験群 a cognitive linguistic approach >

- (1)名詞の指導では実物や視覚イメージを用いて提示する。
- (2)実例から法則性を考えさせる。
- (3)冠詞の用法は原則的なものにとどめ、対象物の認識との関連を中心に提示する。。

<統制群 a conventional teaching method >

- (1)名詞冠詞ともに、文法用語と用例を用いて提示する。
- (2)網羅的になるのを避け、基本的原則的な用法にとどめる。

3. 指導結果

(1)クラス間比較

	実験群	統制群
Pre-test	15.7	14.5
Post-test I	16.3	16.2
Post-test II	16.6	16.3

統制群で指導前に若干低かった成績が指導後にほぼ同じになったことを除き、クラス間の差異は見られなかった。

(2)学力層別比較

平常の試験成績による区分では傾向がつかみにくかったため、Pre-test の点数で上位・中位・下位の3グループに分け、成績推移を比較した。

実験群上位が 18.4 → 18.0 → 17.7、下位が 11.9 → 13.8 → 14.9 と、上位がやや下降したのに対し、下位が大きく伸びて差が縮

まった。統制群も上位 18.1 → 18.0 → 17.8、下位 10.5 → 14.4 → 14.8 と、同様の結果であった。

残念ながら、指導法の違いによる成績推移の違いは見られず、いずれの指導も下位に効果的であった。これは、指導法に差をつけやすいように基本事項中心の指導を行ったため、上位にとってはすでに習得済みの事柄が多く、新たな知識や理解の獲得につながりにくかったものと考えられる。

(3)設問別比較

前置詞の場合と同様、正答率の推移がクラスによって大きく異なるものがあった。①は統制群に比べて実験群で大きく上昇したものの、②はその逆の結果になったものである。

① Do you take (sugar / a sugar) in your coffee? ()適語選択

② "Where have you been?"

"I have just been to () post office."
()冠詞挿入

名詞の可算・不可算の判断と不定冠詞の使用は直結する。したがって、名詞の指導時の認知言語学的なアプローチが浸透しやすい用例と浸透しにくい用例があり、それが不定冠詞の使用の判断に影響する。また、定冠詞は聞き手の判断を考慮する必要から、語用論的な要素が影響する場合がある。また、いずれも言語の慣習となっている用法が数多くあり、その動機づけをたどることが困難な場合が多い。単純化した提示や説明には限界があり、暗記に頼るしかないものも多い。「動機づけ」を与える認知言語学の説明ではカバーできない場合がかなりある。

VI まとめ

1. 方法論的考察

異なる指導法を試し、その効果の違いを求めたのだが、全体として予想したほどの違いは出なかった。これは指導の内容が既習事項を大きく超えるものでなく、新しい事柄の理解と定着を測るものにならなかったこと、また指導時間も短く大きな違いは生じにくかったことが原因として考えられる。

2. 認知言語学的アプローチの効果

従来型の指導とは異なる視点を導入することで、すでに獲得している知識に動機づけを与え、知識を活性化したり理解を促進する効果がある。それにより、言葉をより深く洞察する機会を与えることもできる。

ただし、ある程度の習熟がないとこの効果は得がたく、また網羅的な説明には不向きなため、初級の学習者では曖昧であるとか、漠然とした理解しか得られない、あるいは過度の一般化による誤りを誘発する恐れもある。

3. 仮説の検証

認知文法の知見を組み入れた指導は、従来型の指導と同様に、生徒の知識と理解の獲得に有効であることは示された。ただし、より有効であるかどうかは、学習者の習熟度や指導項目によって異なることが判明した。

VII おわりに

本研究により、明示的な文法指導は有効であること、認知文法と従来型の学校文法は、それぞれの長所を組み合わせることでより効果的な指導の可能性が生まれることが示された。後者については、より長期間にわたる指導を試しその成果を検証してみることで、中学から高校の各学習段階に応じた成果の現れ方を検証することにより、より体系的な指導法の構築が可能になるであろう。

2つの実験授業を行うにあたり、以下の実践研究を参考にした。

Morimoto, Shun and shawn Loewen. (2007). "A comparison of the effects of image-schema-based instruction and translation-based instruction on the acquisition of L2 polysemous words." *Language Teaching Research* 11(3): 347-372

Kishimoto, Eiko. (2007). "A Suggestion for Teaching Countability and Articles of English Nouns at Junior High School in Japan." *Proceedings of the 7th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 7: 536-550